

人はたがやす
水はたがやす
稲はたがやす
牛はたがやす

それでも芸能界周遊日記⑤ 鎌田慧 2

行ったり来たり⑧ 西山正啓 18

「スター」日記⑧ 坂本龍一 4

徒然なるブタ草 竹内晶子 20

子宮がなくなった日 志沢小夜子 6

アパシヨナータほか 斎藤晴彦 22

料理がすべて⑧ 田川律 8

わるいくせ⑧ 八巻美恵 26

小兔のおよめさん グリム十矢川澄子 10

下手の横吹き笛日記⑧ 西沢幸彦 28

名僧日記① 高橋卓志 14

友だちと吞めば本になる⑦ 津野海太郎 30

子供たち⑧ 柳生まち子 16

一点カット 柳生弦一郎

それでも芸能界周遊日記

9月16日 敦煌。空港の建物はプルハブ状。四〇人ほどで満杯になる待合室が一室と荷物検査室があるだけ。おそらく、軍用空港を観光用に転用したのである。客は二人のわれわれ一行と十人ほどのスイスからきた医師の観光団。この町には三泊した。予定より一泊多くなったのは、飛行機が出なかつたためである。おかげで、街をゆつくり歩きまわり、「西の方陽関を出ずれば故人なからん」の「陽関」にまで足をのばすことができた。

ゴビ砂漠を飛んで蘭州へ。夜、同室のIさんと通訳の李さんの三人で街に出る。自由市場の屋台に坐つてピーナツでビール。農民たちが寄つてきて、羊の皮を両手で括げてみせる。仔羊の毛皮が四千五百円までさがる。李さんが「安い」と興奮する。それに刺激されて、Iさんと一人で買つてしまった。

なにに使うのだろうか。

屋台のラーメン屋は、三人ほど使用人を使っている。儲かつているらしく、おかみさんの耳には、控え目にイヤリングが輝やいている。唐辛子がきいていて、ものすごく辛い。「わたしは平気です」と李さんがいう。紅衛兵として下放されていたとき、ご飯に辛子をかけて食べていたそうである。そのころよりは、はるかに生活水準が向上しているらしい。農産物の自由販売が認められたからである。自由化（資本主義化）すると、生活が向上するのが不思議である。

9月17日 上海。スケスケルックにミニスカートの女性が歩いている。造船所で、歩いてきた労働者にきくと、いま欲しいものはカラーテレビ、という。敦煌の自由市場で会つた農婦もおなじことをいっていた。

夜、和洋飯店のバーを覗いてみると、上半身ハダカになつたアメリカ人が皮

バンドを引き抜き、踊っている中国人美女を追いまわす。パフォーマンス。酔客たちの嵐のような拍手。これは退廃だ、と小生も驚く。党員の李さんは当惑し、怒っている。香港からきた女性だよ、きつと、ということと落着く。

9月18日 夜、帰宅。

9月19日 午後、銀座の事務所三波春夫取材。四時間も喋られて疲労コンパイ。朝日新聞社に行つて堀越学園の原稿執筆、徹夜。

9月20日 ついに、風邪でダウン。

9月25日 NHK。三波春夫取材。

9月29日 銀座の事務所三波春夫取材。

9月30日 三重県員弁町。町主催の老人会慰安の三波春夫ショー。町長は関東軍時代の戦友。

10月3日 羽田発十二時四〇分。全日空秋田行き。一時遅れて出航。女子プロレス一座の取材。初めて女子プロレスなるものをみた。意外にも、選

手たちはあどけない顔をしている。彼女たちのほとんどが、骨折経験者。老後の痛さを心配してしまつた。五城目町泊。

10月4日 女子プロレス御一行様のバスに同乗して、山形県新庄市へ。夕刻、人気絶頂のクラッシュギヤルズと街に出て遅い昼飯。たちあがるとき、二〇代前半のギヤルたちは、腰を押えて「あいたた」と洩らした。わたしはすっかり同情してしまつた。東根温泉泊。

10月6日 新宿・歌舞伎町取材。

この日も、歌舞伎タイムスの編集長に案内してもらう。「問題小説」の切りからも半年目。編集者に合わせる顔がなくなつていく。この街にさいきりん出現した店は「ニュー風俗店」と呼ばれ、女子従業員を「風俗ギヤル」というのだそう。月収百万以上は珍しくないとか。

10月8日 沖電気の被解雇者の紹介

で、インドから取材に来ている記者と会う。通訳は元日本留學生のインド人。彼らの会話が英語なのが不思議だつた。この国にも、日本の経営がはいりつつあるそう。

十月十日 昼、月刊「現代」の「単身赴任」の取材。夜、「週刊朝日」の「ゲラ。深夜、「問題小説」のゲラ。

十月十二日 「現代」の取材。大手町の大会社を二〇年ぶりにまわつた。ビルが巨大化したのとガードマンがふえたのにあらためて驚かされる。繁栄と管理の強化のメダルの裏表。

十月十三日 横浜市緑区（小田急線鶴川駅）のTBSスタジオ。こんな山奥に赤坂の本社に匹敵するほどの巨大なスタジオが建っている。またまた驚嘆。日本は偉大な国なんだ。

大原麗子はスタジオではしゃいでいた。スタッフの話では、いまは噪状態とのこと。鹿児島からの集団就職少年

優と結婚する。芸能界はきわめて民主的なところなのだが、彼にとつて、彼女はやはり高嶺の花だつたのではないか。おそらく、一カ月もたないうちに、ウマが合わなくなたんじやないかな、などとスタジオの隅で田舎者のわたしは考えていた。

10月14日 埼玉県蓮田町と練馬区上石神井の住宅地をまわつて、「単身赴任」の母子無理心中家庭をまわる。ひとり残されたエリート社員は、その後も相変らず、猛烈サラリーマンをして働いていたのだつた。

鎌田慧

「スター」日記

ブラジルから帰ってきててもやはり翌日から仕事をしていた。今、とても詳細に書く気にならないのだ。今日は10月21日、実はニューヨーク行の便に乗っている筈なのだがキャンセルしてしまった。……やはり書こうか。

8月22日、studio。アルバムカバリのチェック。音響でデジタル・マスター・テープのチェック。

8月23日、VictorでCD用カッティング。『コスモポリス』ミートイニング。TYOのミュージック・ヴィデオのミートイニング。

8月24日、熊本NHKで「YOU」の収録。

8月25日、熊本から帰京。

8月26日、OFF。

8月27日、音響。サントリーCM録音。瀬戸内寂聴と対談。

8月28日、NHK。「サウンド・ストリート」9月4日分収録。

8月29日、音響3st。AKKOのヴィデオ用リミックス。

8月30日、同リミックス。

8月31日、同リミックス。

9月1日、音響3st、「ソロ・シングル」レコーディング。

9月2日、OFF。

9月3日、ピーカーブーでヘア・カット。キャメル・スタジオで操上氏撮影。品川ソニー、ヴィデオのミートイニング、編集。

9月4日、早稲田アバコ・スタジオ。「ビック・ミュージック」撮影。アルバム・カバー撮影。カメラマン伊島薫。

9月5日、何やら雑誌4誌取材。西武劇場、大貫妙子のコンサートを観る。

9月6日、雑誌3誌インタビュー。

中沢君が元気だった。小学館5F講堂、「写楽賞」選考会。審査員、篠山紀信、中上健次、長友啓典と僕。終わってか

ら朝まで飲んだ。

9月7日、午後からセンチユリーハイアットのスイート・ルームで一時間ずつの大量取材。「外タレ」みたいね。

9月8・9日、OFF。

9月10日、TYOミートイニング。雑誌3誌取材。浅葉克己事務所、「週刊本」の件。赤坂プリンス、浅田氏と「週刊本」対談。品川ソニーでヴィデオ編集。

9月11日、東京プリンス。ミディ・レコード、スクール・レーベル発足記者会見。NHK「サウンド・ストリート」収録。スタジオA、高橋幸宏のアルバム・レコーディング。

9月12日、雑誌2誌取材。音響「原田知世バースデイ・アルバム」レコーディング。

9月13日、雑誌3誌取材。ホテル・ニューオータニ、「週刊本」座談会。出席、菊地信義、井上嗣也、僕。TAK E1スタジオ、「知世アルバム」レコーディング。

9月14日、音響。「コスモポリス」用音楽レコーディング。

9月15日、六本木ソニー。「知世アルバム」レコーディング。

9月16日、OFF。

9月17日、晴海スタジオ・マグ。「ブルー・タス」撮影。一口坂スタジオ、「知世アルバム」レコーディング。

9月18日、雑誌取材。TAK E1スタジオ、「知世アルバム」レコーディング。

9月19日、取材3誌。一口坂スタジオ、「知世アルバム」レコーディング。
9月20日、一口坂スタジオ。「知世アルバム」レコーディング。TYOミートイニング。

9月21日、信濃町ソニー、「知世」。NHK「サン・スト」ゲスト、高橋悠治・細野晴臣・如月小春、カセット・ブックのプロモーション。

9月22日、OFF。

9月23日、OFF。

9月24日、六本木ソニー「知世」。

9月25日、何やら撮影。音響「ソロ・シングル」レコーディング。品川ソニー、ヴィデオ編集。ジャン・ジャン、AKKO。

9月26日、ナニワ楽器、新着のカラーツウエイルというシンセサイザーを見学。音色はフェアライトの数倍良い。NEWZで杉山恒太郎の個展を見る。ジャン・ジャン、AKKOのステージにゲスト出演。ドウビュッシー、ストラヴィンスキー等の歌曲。

9月27日、音響「ソロ・シングル」。

9月28日、音響「ソロ・シングル」。

9月29日、銀座東急ホテル。井村宏次と対談。音響「ソロ・シングル」

9月30日、OFF。

10月1日、NHK「サン・スト」シブrik。音響「ソロ・シングル」。

10月2日、一ツ橋如水会館「写楽賞」授与式。音響「ソロ・シングル」。

10月3日、住友ビル内カシオ本社。

音響「ソロ・シングル」。銀座東急ホテル、秋山邦晴とミートイニング。取材。JCG L、ヴィデオ用コンピューター・グラフィック作画。

10月4日、……………。

10月5日、……………。

坂本龍一

子宮がなくなつた日

九月一六日 ふるえる心、はやる胸、気持は暗く、朝の入院。行先は、東京警察病院、親類縁者に警察関係者がいるわけではないが、ある先生をたよってきたらここにたどり着いたというごく簡単な話。

一八日、手術である。子宮をとるのだ。点滴をぶらさげて呼ばれたのが一二時すぎ、ガラガラとベッドをおさされたりの人に手をふりたくなるような気分、行ってきまゝす。子宮よさらばだ!!

気がつくとき、イタイ。ここはどこだ。何と六人部屋に移されていた。

病院の夜は孤独、痛くて眠れないので、ウツラウツラしていると、身体の奥の方から、もう一人の私が手で押し込んでいるように暖いものが下へ下へと流

れていく、膀胱に入れてある管がとれたのかと思つたが、あまりに激しいので、オタスケベルを押しした。

あらつと看護婦、暖いものは出血で、その夜は結局大騒ぎ。

一九日、朝一番で、膣の先端を縫う。これは局部麻酔、イタイというよりこわい。この夜はガーゼが膣の中につまっていたり肛門をおすので、ガスが出ず縫つた傷口をツンツンこれも圧迫する苦しくて、肛門にこれまた管を入れてガスを抜いた。七転八倒。

二〇日 ガーゼがとれて、少し楽になる。夕方、膀胱の管をとる。起き上り歩く練習、ヨタヨタと、トイレに行く。しかし、ほとんどの時は点滴をしていて、結局見動き出来ない状態。難行苦行の連続。タンがきれず苦しい。美恵さん、中井さん来てくれた。思わず涙。

二二日 もと子宮のところに、ストローのような管が入っていて、今日は

それを抜く日。あれ、あれ、担当医はびっくり、トイレに落ちたんじゃないの？

やっぱりあれかー。前に入っていた人のかと思つた。ストローみたいなものだったけど、ハハハ。医者と看護婦と私となごやかに笑う。

それにくらべ、朝は地獄だった。点滴のハリが入らず六回入れまざるでだめで結局あきらめた。

二三日 もう夜という夜を寝ていない。タンがきれないのだ。タバコは怖いヨ。のどにゴキブリのようにしつこくへばりついていて、のどをかき切つて出したい。

二四日 明るく、華やかに退院祝いと手術を明日に控えている人の励ます会というのを七時頃から病室でやる。メロン、ブドウ、お菓子を配り、茶をすすり、ワーワーガヤガヤ、来年結婚するとうTさんは二四才。卵巣の下に水がたまつたらしい。彼氏は池袋署

のおまわりさん。毎日、毎日やってきて、私たちのおつかいまでしてくれて、親しまれるおまわりさんを目指して、がんばっているのだ。

明日手術をするYさんのつれあいはやはり刑事さん。私服であります。最初入院の日、ついてきてあいさつをしたけど、どこかの技術屋さんかと思つた。そういう服着てたのだ。そしてやさしい目、デモの時と大違い。ケイサツを身近に感じてしまう日々、あとがコワツ。

二五日 抜糸といつても糸ではなくホツチキスのようなもの。肉にくいこんではずしくそう。それでも、ついでいたと担当医は喜ぶ。脂肪だらけのお腹、よくぞついた、エライツ。と自分に言ってる。同じ日に手術したNさんはつかなくて、テープを貼つていた。(あとでテープにかぶれて大変な目に会っていた。)

ようやく濁流の上のつり橋を渡つた

という感じ。(高所恐怖症なので、つり橋など渡れない。)デコボコだが平坦な道が見えてきた。

二六日 シャワーを浴びる。疲れた。二七日 一〇月四日 Yさんの話を

しみじみと聞く。入院する時に義理の父親に夫がかわいそうと言われ、伯母には、退院してもセックスは出来ないとおどされ、電話口で、あなたがかわいそうと泣かれたのだと、彼女は不安気に言う。先生にそのことはきちんと聞いた方がいいと思うが、何か聞きづらいしと口ごもつた。Y看護婦に来てもらつて、説明聞いたら? と私、私が大丈夫と言つても彼女は納得しないのだ。

Y看護婦に来てもらつて、凶入りの説明書片手に大勉強会。ペニスの長さより膣が短いってことはないのよ、精子は逆流して帰ってくるの、卵は身体の中で吸収される、等々、疑問解明してみなすつきりする。それにしても術後

のアフターケアがもう少ししていねいであつてもいいのにとつくづく思う。しかし一方で、女は女の身体を知らなすぎると、このことの方が私には重大な気がした。

子宮をとつた女たちの追跡調査の統計みたいなのつてどこかにないのかなー。私たちは二月頃この二〇六号室の女たちが集まつてその後の暮らし方について会って話し合うことにしている。女にとって、子宮って何なんだろう。とるなという方だつて子宮を考える重さについてとはとるという考え方と同じような気がする。子宮についての学問がおろそかだったというのはあるらしいけど、とつた私には、これだから、あまり重く考えずに暮らしたいな。

生理のない日々よ、こんにちわ。

志沢小夜子

料理がすべて

〈今月の自炊〉①カイワレの味噌汁。カイワレというサラダでしか食べないと思っていたが、三つ葉の代りに使うといい。②メンタイ・スパゲティ。タラコ・スパゲティのかわりにメンタイコを使う。ほかにシソの葉と、なんとカイワレも入れた。いろんな作り方があるのだろうか、今回はマーガリンに、ほぐしたメンタイ、刻みニンニク、刻みパズリコ、刻みカイワレを入れ、ざつといためて、ゆでたスパゲティをまぜ、すべてをほつたらかきにして食べる。③チゲ鍋。鍋の季節になった。去年の冬は西洋風鍋ブイヤベースにこったが、今年は早々とチゲ鍋をやっている。それも魚で、タラキンメダイ、カキ、ようするに白身魚や貝ならなんでもええのとちやうか。トウフ、イトコン、ネギ、ニラ、ハク

サイ、シイタケかシメジ。それらをおろくニンニク、といつても自分でおろせばいい、コチジャン、好みて赤唐辛子、味噌を入れた汁に放り込めばいい。煮立って食べはじめたら、納豆をまてて一カ所にそつと入れ、あつたまつたら取り出して汁といっしょに食べる。水牛楽団の「兎のお嫁さん」のケイコの時、悠治のときで作った時は、いざ食べるという時にぼくの原稿を取りに来た人がいて、ちよつと出て戻つてもたら、もうほとんどなくなつていて、「納豆入れ忘れちゃつた」という。おまけにまだ食べたらなかつたので、今度は味噌味でなく、ポン酢で食べるのを作つた。別の日、うちでやつた時は最後にうどんを入れてしつかり煮込んだ。さらにそれから二日たつて、残つたのに野菜をたし、唐辛子を加え、しよう油をたしてスープ状にして食べた。④カヤクご飯。先月関西でせつせとカヤクご飯を食べたので、今月はそれを

作つた。生揚げ、チリメンジャコ、コンニャク、ニンジン、ミョウガ。以上が材料。ミョウガというのはいささか疑問があつたが、「ま、ええやろ」と入れた。チリメンジャコ以外は細かく刻む。米は洗つてざるにあげておく。ダシ汁は省略して、水、酒、しよう油をまぜて、「ええ味や」と思えるようにする。量は米と等量。炊飯器に米と具の順に入れ、汁をかけて火をつけた。でき上つたら、盛り上らんばかりで大成功！と思いきや、マンナカのあたりの米は生煮えだったので、できるところを食べ、また少量水を加え、もう一回炊いた。うまきうまきだったが、いっばいあつたので、三日ぐらい、朝、昼ともカヤクご飯ばかり食べた。今度は別の具で作ろう。

の料理人であり、ぼくのうちをとてもキレイに掃除してくれるので気を使わないで、といつたら「だって、ぼくのうちだもの」と答えた。かれはアメリカ人だが、世界中どこにもよう似た人たちがいるものだ。

ローレンスの話①黒人は貧しいので大家族制になる。(これはジャマイカのシュガー・マイノットの家を訪れた時にも感じた。そして広くもない一軒家の奥の部屋から、次から次へと男、女子どもが出てくる。誰と誰がどんな関係にあるのか尋ねる気もなくなるほどだった)そこで子どもは三歳になると床みがき、五歳でレモン絞り、七歳になると卵焼きからはじまって多くの料理を男の子でもするようになる。②アフリカも香辛料の多い国、とりわけ唐辛子は種類も多い。中には実を潰さずを使うものがある。ある日うっかり潰したら、その辛いこと。まるでハッパでストーンしたみたいに、頭がどつつか

へ行つてしまったそう。そのローレンスの料理は、かれとの十年の交友の中でいろいろあるのが、記憶に残つているのは、シスコにかれが住んでる時にトリを丸ごと買つてきて、それをいろいろ使つて中華マンジュウを作つてくれたこと。なにより驚いたのは、ジューサー、ミキサーで粉をまぜること。なるほど粉・水・卵をまぜるのに、これほど均等にまぜられるものはない。と思つたら、パークレーのオムレット、専門店もまた、卵をとくのジューサー、ミキサーを使つていた。

〈今月の外食〉「うな鉄」(渋谷)井の頭線渋谷駅のがードのすぐワキ。かつてぼくが食事を終つて出てきたら「乞食！」と声をかけられた立喰いラーメン屋の横。うなぎといえは、うな丼しか思いつかなかつたのに、ここは、キモはもちろん、レバ、背びれ、それに小さい切身を串焼きにするのから、獅子糖、シイタケ、ニンニクまである。

「初花」(上野毛)地元の天ぷらとうなぎ屋。/「南雲」(渋谷)ご存知トウフ屋がやつてる中華料理屋。ぼくはジャヤドウフ定食しか食べないが、この間カラワン歓迎コンサートの時、海ちゃんパンパンジイドウフ定食を食べた。トリをムシて油としよう油と唐辛子で味つけたものがパンパンジイだが、それを細かくさいてトウフの上のせてある。/「中村屋」(渋谷)お惣菜屋さんで、カボチャの煮付がうまい。魚が多いが、このうちに猫がいて、あの日奥のレジで金を払う時、床にじつと坐つた。「どうしたの」と聞くと「ハン・ストやつてんです」とのこと。え？猫のハン・スト。しかもいつもオイシイ魚の残り食べさせてもらつてはるはずなのに。それから一度も見ない。今度はビケでもはつてるのだろうか。ほかに二回以上行つたのは「陶玄房」(新宿)。

田川律

《残酷物語》 小兔のおよめさん

登場人物

話者

兎

グリム学者I

グリム学者II

前妻

うさぎうさぎ

なに見てはねる

かに見てはねる

かねみてきやつきやつ

あれみてきやつきやつ

かれほのすすき

それみてほほほ

だあれもない

ひろっぱのはら

かぜのなかのうさぎ

(兎のつぶやきがおわる)

兎にむかって「しっ、しっ、小兎どん、またキャベツをかじってるね」 そしたら兎のいいすには「嬢ちゃん、おいでよ。おいらの小ちやなしっぱにのっかって、家までいっしょにおいでつたら」 女の子はことわりましたが、三日目にまた兎がやってきて、キャベツをたべてるものから、おっかさんが「畑へいって兎をおっぱらつといて」女の子はそこで「しっ、しっ、小兎どん、またキャベツをかじってるね」すると兎が「嬢ちゃんおいでよ、おいらの小ちやなしっぱにのっかって家までいっしょにおいでつたら」 女の子は兎のしっぱにまたがりますと、兎はとつとかけだして、女の子をじぶんの小舎までつれていって、いうことには「さ、青いキャベツと黍を炊いておくれよ。ご婚礼のお客さまをおつれしてくるから」

さて、そのご婚礼のお客さまがあつまってきました。(どんなご面々だったかつて？ あたし、ちゃんときいちゃったから教えてさしあげられますよ。お客はぜんぶ兎でね。カラスがお仲間さんになって、三々九度の盃を交させる。介添えはキツネで、床の間には虹がかかっているんだって) だけどお嫁さんはかなしくてたまりません。なにしろじぶんはひとりぼっちですものね。小兎がもどってきて、いうことには「さあ、おいで、おいでつたら。ご婚礼のお客さまがたはおなかをすかせておいでだよ」 お嫁さんはや

(話者が話しはじめ)

話者 お喃をひとつ申し上げます。

近頃巷に流行るもののひとつにへ大人のための残酷童話なるものがございますよう。大人は子供の父。とすれば、その大人の師範としての、やさしかるべき子供たちが、近頃やたらに親に殴りかかったり甲虫を分解してみたり、とかくきわけのない振舞いに及んでみせてくれる。そんならひとつこちらもそれに倣って、といつてもまあ、腕力ではとても若いひとにかないつこありませんし、せめて小手先筆先であつばれ残忍非道ぶりを發揮して、身もふたもないこの世の真実を、さらにあられもなく赤裸々に、因幡の白兎よろしく皮までひっぺがしてみせてくれようという、どうやらワニザメもどきの情容赦もない趣向これが意外と受けるらしい。

で、その、兎のおはなし、といつても、日本の白兎のお話ではございません。あるところにおっかさんと娘が、よくみのったキャベツ畑のまんなかに住んでいましたね。そこへ冬になると小兎がやってきて、せつかくのキャベツを片はしから食いあらします。おっかさんは娘に、畑へいって兎をおっぱらつてくるようにいっつけました。娘は小

つぱりだまって泣いています。兎は出ていって、またやってきて「さあ、おいで、おいでつたら、ご婚礼のお客さまがたがお待ちかねだつてのに」 それでも花嫁さんは何もいわないので、小兎はまた出てゆきました。女の子はそこで、小兎で人形をこさえて、じぶんの服をきせると、よしの匙をもたせて黍の入ったおなべのそばに立てかけて、おっかさんのところへ帰ってきてしまいました。小兎はまたもどつてきて「さあ、おいでよ。おいでつたら」 そういつて戸をあけて、人形の頭をたたいたら帽子がぼろつと落ちたんです。

小兎はそれで、お嫁さんでないとわかつて、がっかりしよんぱりして……

——と、ここまではご存じグリム童話の…… え、ご存じないって？ そうですか、それは失礼いたしました。そんなもんでしようかしらねえ。私なんぞは七つ八つの頃から、なぜかこのお話、奇妙に胸の底にこびりついて、わすれようにもわすれられなかつたんですけれどね。むりもありません。だいたいお伽話つてものは、なぜかさいごはきまつて芽出たし芽出たして、型通りの勸善懲惡でしめくくられてしかるべきなのに、そうでしょうが、じつさいグリムのお話全部ひっくり返してみたって、この小兎どんみたいに罪もない者が、かわいい女の子がお嫁にきてくれたと

思つて無邪気に浮かれはしゃいでいたところを、突如悲しみのどん底につきおとされてそれっきりという、こんな浮かばれないお話がまたとあつたら教えていただきたいものです。だからつてしかし、女の子の方を責めるわけにもいかないんで、この子だつて兎どんのいきな誘ひにのつて家までついてきて、じぶんのひとりぼつちに思い至るまでは、彼のためにキャベツや黍など炊いたりしてけつこう尽してもやつたんですし、いざおいとまといときだつて、彼を悲しませるようなことをはつきり宣言するにしのびなくて、すつぽんぽんの身ひとつで出てきてしまつたんですものね。

グリム学者Ⅰ そうです、そこが肝腎。わたしにいわせればこれは不条理の悲劇。当節のはやりでいえば一種のカルチュア・ショックとでも申しませうか。すなわちヒトとウサギという二つの異文化の出会いだか、すれちがいだかの悲哀をものがたるものでして。

グリム学者Ⅱ さよう、だいたい昔話つてものは、人間心理の思わぬ深層をついてますからねえ。これなんぞは、ヒトとケモノどころか、女と男のどうしようもないデイスコミュニケーションを訴える、ペーソスあふれる逸品じゃありませんか。

つかないし——

話者 うるさいわねえ。いますぐ成仏させてあげるから、あんたはだまつてらつしやい。

(と、兎をぶつ)
さ、早く終つちやおう。ここまで大人向きに出来上つてるんだもの。あとはほんの一さじ、ちよつぱり残酷ささえ付け加えりや、りつぱに当世通用させられる。さ、せいぜいお客さまにおもねりませう。

グリム学者Ⅰ 画竜点睛。いつそこんなふうにしたらどうです。——兎はそれつきり、好きなキャベツをたべに行くわけにもいかず、愛に飢えて死んでしまいました。とき。

グリム学者Ⅱ それじゃ、ついでに、——女の子とおっかさんは、その兎の骨をひろつて、キャベツといつしよにスープにしてたべてしまいました、とも。

グリム学者Ⅰ もしくは……

兎 もしくは？

グリム学者Ⅰ いうならば珠玉の短篇。

話者 わかりました。なるほど。それで私なんぞ妙にひつかかちやつたのかもしれないけれど、でも、それじゃまるで、はじめつから子供になんて関係ない、純然たる大人のためのお断りですよ。羊頭狗肉、じゃない、羊頭兎肉もいいとこじゃないの。

グリム学者Ⅰ そう。だから童話として流行らない。

グリム学者Ⅱ グリムも罪作りなこととしてくれたものだ。

話者 じゃ、いつそのこと、ご本からひつちやぶいいちやえばよかつた。だからほら、せつかく私がいつしよけんめい、面白おかしくお話し申し上げても、みなさんやつぱり知つてるおはなしの方が好きなんで、お客さん、ひとつもわらつてくれないもの。

兎 ま、まつてください。お話、まだちゃんと終つてないんですよ。ぼく、どうすりやいいんです。せめてグリム先生のとおりにすませてもらわないと、このままひっこみが

話者 わかつた。ついでに唄にしちやえはいいんだ。

唄

キャベツのスープもうまいけど
うさぎのスープにやかなわな
みなさんどつちをおのぞみか
キャベツのスープはやすいけど
ウサギのスープはたかいぞう
ウサギのスープはアイのあじ
なにしろイノチがけたもの
おまけにユメがついてるもの

(人間たちがわらつているひまに
兎、しくしくなきはじめる)

話者 オソマツてございました。

グリム十矢川澄子

(了)

名僧・日記

九月二十日―二十六日 この一週間を専門用語で「おひがん」という。彼岸は春到と秋到の年二回あるわけだが、春到はいつも春闘と重なって、お布施のベースアップを要求貫徹する……というのにはマツカなウソで、ここ数年來、お檀家の皆様方は、まるで世間が変わっていないみたいにお布施のベースアップをしていない。

彼岸に入るとお参りに行くのが常識であるのだが、何やかやと忙しく、結局適当に終らせてしまった。本職を完遂できなかった元凶は、九月五日にやったシンポのせいで、「ちくま」の編集に手間取ってしまったからなのである。九月二十八日、スラチャイ、モンコン、美恵さんの三人が来る。松本には水牛に集まる特別面白い人達がいる。これは、美恵さんが松本に住んでいた

筋のお兄さん達とのトラブルが生じる。その処理は常会長たる私の役目であるが、本当のところオツカナイ。でも地域のため、善良なる市民のため、たえどツカレようと、おどされようと、いかねばナルメー。と健さんみたいな心境で露店商のダイガシ（字を知らない）を訪ね交渉するわけである。彼等だつて人の子だ。話せばわかる。俺だつて君達と同じ位頭を刈りあげてるし、背中にや三つもホクロを背負つてんだ。それに、あんたらは山口組だか何だか知らネーが、俺達や、「トントンカリリーのトナリ組」だ。マイッタカーノなど顔をピクピクひきつらせながら逃げ腰での交渉をする。ワンスアポニアタイム・インアメリカみたいなわけにはいかないネー。

十月五日、小学校は中間休み。昔は稲刈り休み、農繁休みといった。この時期を利用して花の東京へ家族連れで行く。女房殿は京都の田舎モンなので

ということに大いに関係があるみたいだ。皆、一風変わりもので自分を出すことが上手で、集まると楽しくて仕方ない。そんな連中が集まって、酒呑んで明け方まで話しをしていたらしいが、なにしろ一番最初にダウンしたのでその後どうなったかは全く知らない。

十月三日四日、我が寺を神宮寺という。神様とお寺が一緒になった面白い名前だが専門は寺である。しかし、隣りにはなぜかお宮があつて、年一回盛大なお祭りを催す。しかもなぜか今年が私が常会長ということになっている。またなぜかお社は根っからクライではないから半分迷惑そうにしながらも内心ウキウキ出かけていく。この祭りは別名松明（たいまつ）祭りともいい、日本三大奇祭といわれ、（これは地元の見光協会が独断で適当にキヤッチフレーズとしただけのことで、他の二つと同じであるか明らかでないし、奇祭と呼ぶにはまともすぎる）直径三、四

東京は修学旅行で行ったきりだという。しかも東京タワーに登り、お堀に写つた二重橋の前で写真を撮つた懐かしい思い出があるのだというが今回は子供達のために、東京デイズニールランドへ行く。でも坊さんの行くところじゃないね。あそこは……。

十月六日、世田谷羽根木公園へ。雑居まつりの準備風景を見に行く。西山正啓さんはじめ、知り合いに沢山出合う。松本に居るみたいだつた。

十月十三日十四日、松本きもの研究会の女性四十名を引き連れて京都へ行く。もちろん全員着物。「きもの良さ、さわやか信州のキャンペーン」とはいうが、珍道中にかわりはない。最初四十人ものかわいい女の子と二日間も旅ができると聞いた時、思わずゴクリと生ツバをのみ込んだ。しかし集合地点には、中年などとお世辞にも言えない人生経験が豊富そうなオバサマが半分以上いたのだ。こいつはサギだ。

メートルのたいまつを下の町からお宮へ何人もでかつきあげていく。湯の町は一面煙の中に埋没し、炎の競演に観衆は興奮するという、よくあるお祭りのパターンが出現する。

さて、私はといえば、お宮の拜殿に座り、次から次と訪れる信心厚き人達に、お神酒をおふるまいするという重要な役どころを担当させられたのだが、坊さんが神主みたいな仕事をしていることに誰も全く気付かないのである。自分自身も何か変だとは思つたが、そこはそれ、一杯も二杯も入っているから「まあ、何でもいいじゃん」てなわけだ。「はい皆さん、ご苦労さん。お神酒をドーズ」と、いつもの調子の良さがついつい出てしまい、セクトのちがいを飛び越えて、世界は一家・人類は皆兄弟となつてしまった。

祭りに夜店はつきものであるが、この狭い我が常会に、八十店以上の露店が出るのだから、地域の人々ともその

見事にだまされた。

飛行機で大阪へ、京都観光協会へ表敬（ヒョウキン）訪問、夜は嵐山「錦」で夕食。五時の予定が七時まで待たされた。腹のへることに腹がたつこと……泊りは我が大本山妙心寺の山内の大心院。十時頃から酒宴。にぎやかにやっていたら苦情がきた。ここは神宮寺ではないのだ。神宮寺ならこんなのフツツーなのにネー。今月も忙しい月でありました。

高橋卓志

乗物に乗ったりして、隣に子供たちが坐ったときは、本を読むふりをして、耳をすまます。きき耳をたてているおばさんがいるよ、子供たち、お気をつけ！

隣に坐ったランドセルの女の子は二年生くらい、ほっそり小さい。その前に背の大きい子が立っている。

「きょう、なにをしたの？」大きい方が聞く。

「衣装をつけてね、えーとあれ、動きをやったの。」

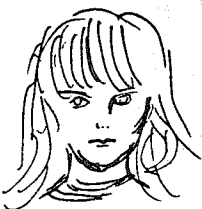
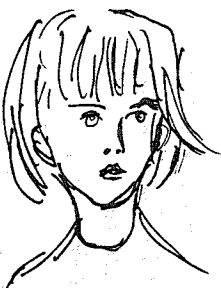
「ああそう。なんていう題？」

「うさぎの宇宙旅行。あ、ねえ、ナルミさん知ってる？あの人が出てたんだけど、ヤマダさんてなまいきだっ

て……転校生で。」あ、そのうさぎの話、もう少し聞きたいものですな。

「あ、これ、一年生のときから使ってるのね。」

「うん、そう。」ランドセルにぶらさがっているアクセサリを指先でつついて言った。それからもう話すことがなくなったみたいに黙ってしまった。子供たちでもずいぶん気のならない会話するのねえ。どうでもいいというふうの話や口ぶりが大人っぽくて、その口もとを見ていると、この子達をずっと大人にしてみても、容易にその顔つきや口ぶりが想像できてしまって驚く。



行ったり来たり

九月二十三日 東京ボランティアーセンターから頼まれた映画『もうひとつのライフスタイル』（仮題）十六ミリ・三十分の撮影を始める。この日は代々木公園で行われたゆうなの会主催の沖繩エイサーの夕べ。沖繩には一度も行った事がないしエイサーを観るのは初めてだが、撮影を忘れてしまいそうなほどに熱中してしまった。同じ盆踊りでも、鉄製パイプで建てられたヤグラに三波春夫ぶしてワンパターン化されたあちらこちらの盆踊りの何と貧弱な様であることか。踊りの輪にも加われない我身の不自由さにひき換え、彼らの解放感覚はどうだ。僕は下関出身だけどエイサーの様に継承されてゆくものを十八になるまで下関の地で見出せなかった。彼らをうらやましいと思った。

九月二十五日 松平のひがんだぼん

事務所までミーティングを撮影。夜は徳永和理さん（代表）へのインタビュ。お互いヒゲ面。今度の映画に登場する人たちはヒゲ面が多い。撮影に入ってから伸ばし始めた人もいて困ってしまうのだ。本当に。ヒゲ面でないのは女の子だけ……。

十月五日 朝、撮影に出かける前子供の様子は何となくおかしい。さりとて熱はない。心配ではあったけど、とに角何かあったらここに電話を下さいと撮影先の番号を書いたメモを保母さんに託して出かけた。現場に着いたら早速連絡が入っていた。子供が熱を出して小児科に連れて行ったという。主夫業の大変さをこの日ほど味わったことはない。

十月六日 弁当づくりを楽しみにしていた保育園の運動会だが撮影でもあり、子供が熱を出したこともあって参加出来ない。子供は前日ほんとうに運良く我家に来たつれあいのお姉さんに

さんから電話。世田谷の雑居まつりに来るとのこと。

九月二十七日 僕の言い出しっぺで始まった小向京子さんの月例コンサート第一弾。ゲストは沖繩出身の知念良吉さん。つれあいが不在のため、息子を連れて行くが、演奏している前にしやしやり出て観客に向かってVサインを出したり、僕が司会をしている傍に来て、「おとうさん」と微笑みかけたりで冷汗をかいてしまった。親に似て目立ちたがり屋とは舞台裏の声。

九月二十八日 午後一時から撮影の打ち合わせ。夕方、飯田橋のケイサツ病院に入院している志沢さんを見舞う。九月二十九日 『みちことオーサ』の上映で吉祥寺と中野を行ったり来たり。すべーす・しょう中野では名取センチの、おもしろ学校での上映で僕は映写係。武蔵野公会堂の方は上映実行委主催の映画とパネルディスカッション。観客は両方合わせて六百人。映

保育をお願いする事が出来たから、この日ばかりは安心して出かけられた。ただただ感謝。夜は翌日の早朝撮影に備えて羽根木公園泊り。

十月七日 雑居まつりの当日。会場があまりにも広すぎて福祉切り捨てゾーン、核と戦争を考える、全国からの広場など各広場の催しのピークに仲々立ち会えない。おまけに一台のカメラでしかも少ないフィルムで雑居まつりの全容をと欲張ったものだから、撮影には苦勞した。こういう時は演出の側がほんとうに問われる。

この指とまれ方式で始められた雑居まつりも今年で九回目。参加者は一万人を悠に超える。僕は今年が初体験だが、老いも若きも、男も女も、障害の有無など問題にならない文字通り「雑居」の雰囲気は共感を憶える。雑居であるからこそ、実行委の世代交代が無理なく行え、毎年／＼エネルギーが引き継がれてゆくのだと思う。雑居まつ

画が出来てから二年、この日ようやく観客総数が一万八千人に達した。ついでに二万人といきたいところだけど……。

十月一日 調布YWCAでシャプラーニールの人たちがやるバザーの撮影。夜は一週間後に控えた世田谷雑居まつりの事務局会議の様を撮影。一年振りの撮影で心うきうきルンルン気分である。

十月二日 羽根木公園の近隣住民に挨拶をして回る雑居まつりの実行委員長と事務局長を撮影。一軒目は訪問相手に撮影の諒解をとってやってみたが、何だかお互いシラケた感じになってしまい。カメラを向けて断られたらそれはそれで仕方がないということにして二軒目からは出たとこ勝負にした。それにしてもドアを開けたらカメラが待っているというのは迷惑な話である。

十月三日 早稲田奉仕園の中にあるシャプラーニールの屋根裏のような狭い

りは全国でも稀有な運動であるのだから。

十月八日 毛利蔵人さんに作曲してもらった『聞こえるよめぐみちゃん』の音が……（ビデオ・三十七分）の音楽録りを依頼主の自宅のピアノを使ってやる。毛利さんとは二度目の仕事だが、彼は人柄同様ほんとうにやさしい曲を書く人だ。

十月十五日 三鷹やさい村の沖繩出身の青年、大城君がやっている無農薬野菜のひき売り（行商）を撮影する。生産者と消費者を結ぶ産直活動もいいが、彼らの地域を巡回して歩くひき売り活動はもっと面白いと思った。大城君の話に依れば、最初買いに来る人がひとり二人でも回を重ねるとにその数は着実に増えているという。地域に根差した運動というのは、彼らのこうした日常活動の中にこそ学ばべきものがあるのだと実感した一日であった。

西山正啓

徒然なるブタ草

さんまの塩焼きを食べる。焼き魚のはらわたは苦い。苦いんだけれども我慢して食べる、食べる。別にお母さんに食べなさいとか言われるわけじゃない。でも苦いものは身体にいいような気がするし、それに、今晩は松茸のおつゆもあるから、ちよつとくらい我慢しないとバチがあたる気もするから。

バチあたり。調子に乗って酒を飲む。カラオケで声をはりあげては飲む、飲む。胃袋がシクシク泣いている。おととい、二日酔いのヨタヨタ胃袋に肉まん、あんまん、牡蠣鍋におはぎを詰め込み、夕べは「麻雀放浪記」を見た勢いで、しゃぶしゃぶに日本酒でフイーバーしてしまった。もう若くないのに。若くない。鏡を見る。のぞく、のぞく。目の下の隈と小じわが消えない。笑顔に品がない。発声練習をすると二

がら幕そでて主題歌のピアノ伴奏をしていた。

ピアノ。ピアノのお稽古は土曜の午後。土曜の午後といえば、隣のクラスの阿部桜子ちゃんたちとバレエの試合の約束もある。お誕生会にも招待される。休みたい、休みたいと身体をはってだだをこねても、二回に一回は恐いお母様に断念させられる。念願かなって高二の秋、十数年間の惰性におさらバして自由の身になる。土曜の午後に穴があいた。しかしそれも束の間、数年前から夢の土曜日は芝居の稽古で必ずつぶれる。だから、土曜日にデートのお誘いはタブーなのよ。

デート。ある夕暮れ時の井の頭線。制服姿の高校生男女。第三者の私。女「今日、みんなで目の大きさ計りっこしてさあ。あたしやっぱ目、小さいみたい。みんな笑うんだよー」と、五木ひろしみたいな目をしばしばさせる。男「俺、ちつとも小さいと思わない」

重頭になる。年下のかわいい男の子とデートをするとおごりたがる。腰が痛い。「あーしんどい」と誰も聞いていないのに何度も大声で言う。酔っ払いのおじさんにかまされても、一緒にジルバを踊り出してしまふ。以上おぼさん症候群。

おじさん。仕事先の大好きな課長さんが、何かの容疑で逮捕されて、いつの間にかいなくなってしまう。あわてて新聞を捜したけれども何も見つからない。昼休みが暇になってしまったので、一人で編み物。編む、編む。「あしたはお昼、一緒に食べましょう。お弁当持ってきて下さいね」と言ってきたり、おじさんはいなくなってしまう。

お別れ。小学校六年生の時、先天性の心臓病だった塩田くんは、「手術が成功したらボクサーになるんだ。そして、たけ子、試合見に来てね」と、朝礼をサボって教室に居残っていた私

(二人、見つめ合う。赤面する私)女「あたし中学ン時から好きになる男ってさあー、目に特徴があんのよねー」男「俺の目特徴ある？」女「うん」(二人、見つめ合う。照れる私。)

その二、第三者でない私と正太郎の物語。正太郎「ねえ、キスしてもいい？」私「だめ」その後、正太郎は、ゴキブリにヘアトニックをかけて火をつけた話とか、青虫をポケットにいっぱい詰めて、洗濯するお母さんを泣かした話とか、ワルガキ時代の自慢話を山ほどしてくれた。私はといえば、「へえ」とか「うっそお」とか言うだけで、歯を見せずに笑っていた。口びるがもぞもぞした。その時の正太郎は、虫も殺せないような優しいちつこい目をしてた。

昆虫。この間、初めて飛行場に降り立った。飛行機に乗ると、街が豆つぶみたいに見えることなんて承知の上だったから、そんなに驚かなかったもん。

に語ったとき、数日後亡くなった。その時、以前私の誕生日プレゼントにと彼がわざわざ作ってくれた、のりと手垢でまっ黒に汚れた画用紙細工を、捨ててしまっていたことを悔やんで泣いた、泣いた。私がつつと祈ってあげなかったから彼が死んでしまったのかもしれない。生まれて以来、二度目に犯した犯罪だと記憶している。

生まれて初めての犯罪。小学校二年生の登校時、近所の男の子をふざけて追いかけていたら、その子が道路で車にはねられた。その子は目の前で三メートルくらい宙を飛んだ、飛んだ。いつ警察の人が私を連れに来るか来るかと毎日一人でおびえていた。三日後、退院した彼が元気に学芸会の舞台をはねまわっているのを見た時、幽霊を見ているのかもしれないと思った。

学芸会。劇に出たい、出たいのに出してもらえない。いつも合奏の方に回される。小学校最後の学芸会、泣きな

でも飛行場は広くてずるいなあと考えた。それから飛行場に止まっている飛行機は前から見ると、虫みたいだ。コオロギなんかガニ股でしゃがんでいるみたいだ。飛行機はじつと座っている時の方が、断然おもしろい。

ヒラヒラの服を着た方が断然お嬢さんばい。パーマをかけた方が断然大人っぽい。マニキュアをぬった方が断然お姉さんばい。ラメ入りのルージュの方が断然色っぽい。お化粧をした方が断然きれい。だから私は、素顔が断然おもしろい。断然なつかしい。徒然なるブタ草の戯言でした。おそまつ。

竹内晶子

アパシヨナータ

キム・ジハの詩を読むと 悲しい 涙が流れる 切ない
キム・ジハの詩を読むと 怒りで 身体が震える ガタガ
タ キムジジハ 君は いずこの道から いずれの道へと
オイラを導くのか 答えろ
キム・ジハ 泣いて キム・ジハ 笑って キム・ジハ
黙って 一人ぼっちか そうではあるまい 君には数多の黄
金に輝く魂達の 無数の叫びの只中 君には見えるさ同胞
たち人間が 希望という字は 日本国では あんまり使わ
れてはいないのです いわんや 民主主義などという字は
全く 形骸化しております 複雑怪奇な状況なのだ
ますます とう晦して行く インテリ 己れの存在証明 即
ち へのへのもへじで 煙に巻くのです 己れの保身に心を
配って なるたけ 曖昧模糊なる関係 分り易さには軽蔑
的 且つ 難解なものをもてはやす馬鹿だ キム・ジハの
侮蔑 聞こえてくるようだ 反日民衆 搾取を憎んで 日
韓ゆ着は みんなの責任 大韓航空 前からスパイだ!
なんとか言っては 反ソだ ロスケだ 右翼も左翼も仲良
く連帯 アジアの民衆 お安く使って――

軍隊ポロネーズ

ワレサに ノーベル平和賞 ドッチラケの クレムリンで
は 断々乎として 怒ったらしい そりやそうだ 神経逆
撫でされる思いだったろうよ かつては我が国の人 ギョ
ロ目の榮作ちゃんか 嬉々としてもらったものを 今は
ワレサがもろうという めぐり合せだな いやはや 結局
のところ どうでもいいのだけれども 全ては政治のかけ
ひき ノーベル・ダイナマイト ドカーンと一発 ポーラ
ンド炸裂 連帯喜び ヤルゼルスキちゃんカンカン やれ
やれ
ワレサって一体誰さ ワレサっていったら彼さ 冗談かま
けて おちよくるレベルでしか この問題は 問題にも何
にも なりやせんのですな
何たる暴言 何たる無礼者 全く愚かな状況認識しか 持
ち合わせてはいないのですね ホントに全く ああ 腹が
立つ ああ 不愉快だ 一体あなたは 今のポーランドの
現実を分って 物を言ってるのかどうか問題だ
何も分って 物を言ってるのかどうか問題だ
何も分ってねえんでがす 見たわけではねえから そんな

お話変って このアパシヨナータ キム・ジハさんにはび
ったりこんだと 私は前から思っていました 皆様 試し
になんでも良いから 帰って 読んだらいかかでしょう
ベーターベンさん すぐれたところは このわかりやすさ
にあるのであります 湧き上る勇氣 不屈の精神 キム・
ジハさんとはいい勝負――
叫びは 反抗のしるし 変革 人がつくる 解放 世界の
夢 愛する人がいるか 赤は闘い 青はブルース 意志だ
力だ いくぞ みんなで手を組み 一歩も引かずに 怠惰
な日常 破るぞ今こそ 自動車をやめて 自転車通勤 テ
レビを観ないで ラジオに切り換え 早よ寝て早起き
はんは玄米 野球は阪神 新聞アカハタ 階級闘争 夢の
また夢 サラ金地獄の 現実あるのみ
キム・ジハの詩を読むと 悲しい 涙が流れる キム・ジ
ハ 泣いて キム・ジハ 笑って キム・ジハ 黙って
一人?

作曲 L.V.ベーターベン
作詞 斎藤晴彦

ことよりも 今月の家賃を どうして払えばいいのかが大
問題なんです。ああひにちが追ってる 大家さんが追っ
かけて来る 恐縮ですけど ホント 必ず返しますですすか
ら 五万ほど 貸してはいただけないでしょうか――
ドガガガガードガン ミサイル発射!! ズガガガガーズ
ガン 原爆投下! ドガガガガガ ズガガガガガ……
遂に始まった 世界の戦争 核兵器 飛び交い 街が燃え
て 無くなり 消え去り消え去り 逃げて 隠れて 放射
能 浴びて ニューヨーク モスクワ 灰になり ロンド
ン ワルシヤワ 溶けて流れ 東京 北京にパリに ベル
リン ローマに テヘラン ソウルにピョンヤン ジャカ
ルタ マニラに上海
ワレサに ノーベル平和賞 廃墟のワルシヤワの街 錆び
つき焦げつく メタル一つ 土に埋もれて 今も誰もひろ
う人もいません 南極のペンギン 北極の白熊 バイタリ
テイあるゴキブリ ゴロゾロ それからシラミに 南京虫
インキン・タムシにキンカン お陽さまだけが 今日東
からのぼってきました ポーランド ソ連も消えて 日本
もアメリカもない 回収不能の地球の平和 ノーベルさん
は ダイナマイトを発明した人でした。

作曲 F・シヨパン
作詞 斎藤晴彦

祖国との別れ

なぜ 私たち日本人は 自分の国を 祖国と呼ぶことにな
ると 言うに言われぬ異和感を持つ 民族 民族という
言葉にも なぜか 泌みついたにおい 大和民族 帝国日
本 八紘一宇 アジアの覇者 ジャパニーズ 戦争に敗れ
国家主義から 民族主義へと 生まれ変わる日
八月十五日 蟬なく暑い日 三十と九年前 果して 何が
どう この日本で 変ったといえるのか 国の仕組みは
同じじゃないか 私たちの手で 新しい国を造ったのだと
は 誰も言えない 天皇は居すわる 自衛隊はウジヤウジ
ヤ 経済侵略
誰もが分ってる この日本の 国としての構造は、 立憲
君主国 天皇の国 そんな国を 誰が祖国となんて呼ぶか
いやいや 民族の誇り 世界の理想の憲法だ 平和憲法
第九条 これがある なんて どいつが胸をはり うたが
いもなく 偽りの真実を 声を大にして 叫んでる奴がい
たら 会いたくないんだ
頑張れ日本 めげせ金メダル これ即ち 私たちジャパニ
ーズの精神構造だ 何もこれは お上が 下々に ゴタク

垂れたことばではない われわれの 昔から 心の中にひ
そむ本音 これで アジアの民を 数多 殺した
ある日 ある時 この日本が 共和国になったとしたら
ラララララ そんな夢をみてたら ねずみにかじられた

作曲 M・K・オギンスキ
作詞 斎藤晴彦

カラワン歓送コンサート

12月16日(日) 午後5時半開場
午後6時 開演

会場 東京・渋谷、新生TAKE OFF
7 (渋谷公園通、山手教会向い) イ
シバシ楽器6F TEL 479-
5297)

入場料 前売 二千円
当日 二千二百円

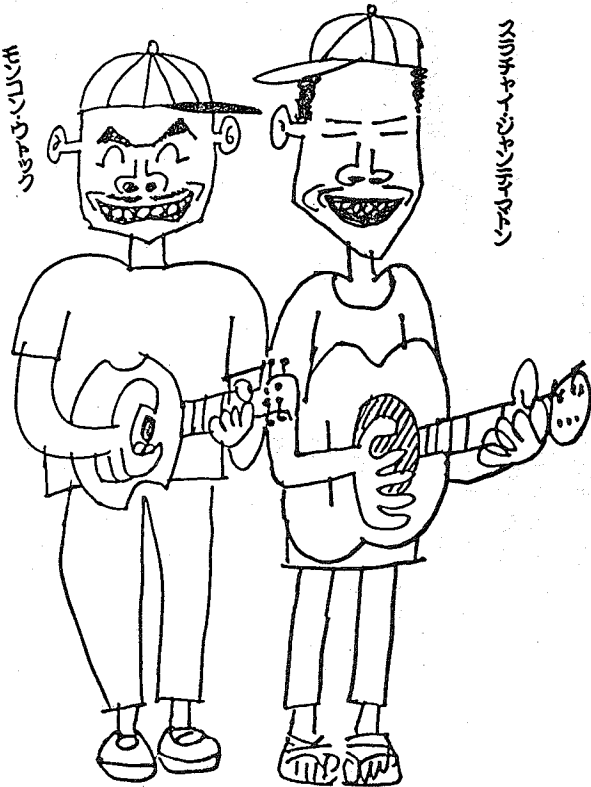
(いずれもドリンク付)

予約・問合せ
アート・フロント 461-3172
ホーガン音楽事務所 405-8551

出演(順不同)

カラワン楽団(スラチャイ・ジャンテ
マトン、モンコン・ウトック)
小室等
水牛楽団
吉原すみれ

三宅榛名
斎藤晴彦
矢川澄子
高橋鮎生
如月小春
そのほか、当日ゲスト出演もあり。



わるいくせ

十月はたそがれの国、とブラッドベリは書いた。十月生まれのわたしは、たそがれの国にそうとうな愛着があるのだが、こしは遠来の友のおかけか十月といえどもいっこうにたそがれる気配がない。

その遠来の友、カラワンのストラチャイとモンコンは農村漁村キヤラバンが本格的にはじまろうという前日、うちの一部屋をしめきつてなにやら録音をしている。ストラチャイはピンをひきながら自作の詩をよみあげ、それにモンコンのシンセサイザー(！)がかさなる。十月十四日、バンコクのタマサート大学でこしもひらかれる革命記念日の集會に送る、ふたりのメッセーヂを録音しているところなのだ。46分テープのA面のはじめに、5分ほどのそのメッセーヂを録音し、残ったとこ

ろにはヴィクトル・ハラのレコードをいれて、速達で送った。カラワンのあとふたりのメンバー、ウイラサクとトングラーンは十月十四日には、その集會で演奏するという。

遠来の友がうちにいるので、お釜の中にごはんをきらせない。朝おきたらまず、ごはん。どこかへ出かけて帰ってくるとおなかすいたといって、ごはん。夜はお酒をのみながら、ごはん。ごはんさえあれば、あとはありあわせのものを、にんにくと唐辛子でいためたものがあれば、うん、やつぱりうちで食べるのがいちばんおいしい！ということになる。モンコンはとりわけお釜と酒ビンを管理するのが好きだから、ごはんとお酒のおかわりは彼に要求しなければならぬ。お客がくるとさつさとコーヒをいれてもてなすのも彼。……そうか、わたしのうちは、彼らにとつても自分のうちであるのだ。

そうだ、だからいっしょにいても疲れないのか。お客さんがいると疲れるでしょう、たいへんね、とよく言われるけれど、そんなに疲れもしないし、たいへんでもない。きつと「お客さん」ではないからでしょう。

晩ごはんの続きで、しゃべりながらお酒をのんで、いつの間にかストラチャイとわたしだけがとり残されている。あとの人はみんな酔っぱらったかねむたいかてさつさとねてしまったから。寒い晩で、ストーブの用意はまだしていなかったの、かわりにろうそくを灯して、かたりあった。気がつく、いつの間にか午前4時。エツ、きょうはいったいどうしちやったんだろう、とストラチャイは頭をふっている。女のひととこんなふうにならぬでしゃべるなんてことは、ほとんどないんだよ。ふつうはサ、しゃべるよりいっしょにねることをかんがえるからね。今夜は

特別、特別！というのでわらってしまった。こうした男ごころを理解する能力がわたしにはどうも欠けているらしい。

へカラワン歓迎コンサートは十月二十七、二十八日とユーロスペースで両日とも超満員。来てくださった方にはある種の苦痛を強いたのではないかと反省しております。

タイトル通り、カラワンを歓迎してはなやかなコンサートになった。日曜日には坂田明さんと「スター」日記の坂本龍一さんが特別出演。

水牛楽団もこのコンサートがとりあえず休業明けのきつかけとなった。水牛楽団をやって食べていこうというのが、ある時期の夢だったが、そうはいかなかった。だけど、夢は消えても、コンサートを自分たちでやるのはちよつとやめられないところがある。生きるための歌ならぬ、生きるための楽し

しみ？

コンサートの企画ができあがると、チラシ用の原稿を平野甲賀にわたす。

このごろは柳生弦一郎の絵、平野甲賀のデザインときまっているが、印刷所から現物がとどくまで、どんなチラシなのかわからない。印刷代は払うけど二人はタダばたらき。

「小兎のおよめさん」の兎は柳生まち子がつくった。材料費五千円ちようだといわれているだけ。

矢川澄子兎が黒姫から上京してきて練習をすることになると、津野海太郎や斎藤晴彦がやってきて「演出」めいたことをしてくれて、終ればいっしょに飲み食いする。そのときのアイディアが平野・柳生家に伝わって、水牛楽団の美しいタレ幕(?)もできた。

当日の進行は田川律で、会場整理も毎回のこと、今回は田川邸の毛布ありつたけ持参しての大奮闘。アート・フロント・プロデュースは

もちろんれっきとしたマネージメントで、別に水牛楽団はその専属ではないけれど、なぜか予約受付をやってくれということになる。

ほんとにまったく、どうしてみんな一文の得にもならないのに、水牛のために熱心にはたらくのだろうか？

演奏者も仕事としてやっているとがやなくて、自由にたのしんでるところがよかった、というのがカラワンの二人の感想。そういうことかしら。

このコンサートに出演できなかった小室等さんは、たぶんくやしきの余りだとおもうが、十二月十六日のへカラワン歓迎コンサートを発案し、ついに現実のものとなりました。くわしくは25ページのおしらせかチラシをごらんください。

八巻美恵

下手の横吹き笛日記

そんな訳で—先月号に書いた芝居の件—どうしたものかと考えていると、台本を持って現れる人がいたり、スケジュールを問い合わせる人がいたりして、結局やることになってしまったのでした。「きぬという道連れ」という秋元松代さんの作、市原悦子さん主演で番衆プロの公演。劇中の歌二曲と、劇の音楽を四曲程書いた訳ですが、予算の関係もあり、ほとんど私一人。何種類かの笛と、シンセサイザー、高田みどりさんのパーカッションの組合せて作ってみる。録音の場所が普通のマンションの様な所なもので「では参ります。テイクワン」なんてなことを言って始めてみるが、佳境に入ってくると、「毎度おなじみ、ちり紙こうかん、古新聞古雑誌……」なんていうのが入ってきたりしてやり直し、もう一回と言っても、何も五線譜に書いてある訳ではな

事ではあるが、又々、仕上げがぎりぎりになってしまふ。本当はもっと早くに出来上っている予定だったのに。

九月三十日、七時からアバコススタジオ、池辺晋一郎さんの作曲、劇団地人会の劇音楽、パンフルートで何曲も演奏したものだから、口唇が痛い。

十月一日、文化会館小ホール、崎元讓ハーモニカリサイタル、前半は、三宅さんとハーモニカのデュエット、後半が入って、三人でデュエット、トリオ、フルート、バスフルート、キーナ、パンフルート、ヤンチンとまるでこじぎの引越しの様な大荷物。ヤンチンなどは、何度練習しても、楽器をひく技術が無いものだから、毎回、ちがう所をたたくてしまふし、タイミングもまちまちになる。本番も譜面とは違うことを弾いてしまふ、もはや開き直りの世界、演奏家から、一変して作曲家、編曲家となる。

十月二日、先日書いた、芝居の唄け

く、ほとんどアドリブでやっているのだから「あれえ、前の回のテイクの方がよかつたんじゃないの」なんて非情なことをいう輩がいたりして、そんなものは、もはやもどれる訳もなく、あとの祭り、世の中は涼風などたち、季節も秋だというのに、やたら汗がたらたらと流れ、笛を吹いているので、それをぬぐう事もままならず、じゃクラーはという、音がうるさくてダメだという。もはや、やけくそで、音なんか妙に大きくなり、何回かとううちに、「うん、これはうま〜いっ」などと、これみよがしに言ってみたりすると、暑さとタバコの煙の目にしみる痛さの限界が一致したのか「うんこんなものだろうな」と、何やら訳のわからない言葉が返ってくる。

何せ、唄を作るのも、曲を書くのも初めて、台本を読んだだけで、何となく作ったものの、芝居につけてどうなりますやら、何とも不安であるが、ま

いこに来ていただきたいとの事。けい古場のドアを開けると、「なんだ、なんだ、それはだからおまえさんの芝居はくさいんだ。なにやっているんだ」なんていう大声に立ちすくんでしまふ。芝居のけいこも終り「では先生、唄の方、お願いいたします」と言われる。四人の女性合唱は、ママさんコーラス、三人の男性はロシア民謡風、しかし、かの演出家の様な調子にはどうしてもなれず、「すみません、もう少しそこを……」てな具合で妙にへつらった感じになってしまった。

十月九日、八時よりKRSスタジオ、友人のギタリストの編曲で歌のバック。十月十二日、朝NHK501スタジオオ、子供番組の音楽。後信濃町ソニー、大編成の映画音楽、時間を過ぎても録りきれず、次のスタジオへ行くと、フルートがないないと大さわぎになっていた。前の仕事のマネージャーに連絡しておく様に頼んだのを忘れてし

あいいか。

九月二十三日、創価学会の大会の音楽録り十一時よりピクタースタジオ、アメリカ人のアレンジャーが指揮をしたが、全くのでたらめ、棒はわからず、言葉はわからず。

九月二十七日、朝十時から三宅榛名さんの家でNHKのテレビ録画、朝早くから、大そうの人数が来ていて、はればつたい顔で笛を吹いているところをとられる。まるでにわのような顔。午後本番なので早々に失礼する。

夜、「新しい音楽の世界XI」ムジカプラクテイカ演奏会。駒場エミナース。シエーンベルク「弦楽四重奏曲第二番」

ジョルジュ・リゲティ「木管五重奏曲 六つのバガテル」

パッカニーニ「室内楽曲」

近藤譲「忍冬」

九月二十九日、三時より三宅榛名さんのお宅で最後のリハーサル、いつもの

まったらしい。もつとも三十分も遅刻してしまつたのだが。

十月十四日、日本青年館、作曲の個展、守田正義、水牛楽団、「里子にやられたおけい」悠治さんのピアノソロ、バラードNO2、パストラール。

十月十五日、十二時〜三時、CMの録り直し。

十月十八日、十一時より、六本木のソニーなつかしのフォークソング特集、三時からオンキョースタジオ、CMの音楽録り。七時からワセダアバコススタジオ、テレビのサスペンス映画の音楽。アルトフルートのソロ、定型である。

十月十九日、羽田健太郎のトヨタ自動車CM。一時からアバコススタジオ、林光さんの音楽録音。

十月二十日、十二時よりNHK501スタジオ韓国の大道芸人の画につける音録り、悠治さん作曲、私と美恵さんと三宅榛名さんの四人。

西沢幸彦

友だちと呑めば本になる

十一歳の少年のききがきをした。これは毎朝、三人の妹たちのために朝飯をつくっているの、その料理の話とか、保育園以来の片思いの恋人についてとか、ちかごろになくなかみのつまった話をきくことができた。

ききがきにはテープ・レコーダーをつかう。巻き戻しや早送りをこまめにくりかえしながら、以前であれば2Bのエンピツで、いまならワープロで、数時間まえ、あるいは数日まえに話されたことばを文字におきかえていく。こんどは相手も少年だから、とくに話に飛躍がおおい。まえもって準備してあった理屈で筋道をたててくれることもない。その飛躍や空白を生かしながら、なおかつ読みものとして力のある原稿をつくらなくてはならない。いつもそうなのだが、私のばあいは、その過程でいくぶん話の筋道をつけすぎる癖

たくさんさんの術語や伏線や象徴が有機的・官能的にからまりあったようなものが苦手で、そっけない断片の集合体がすき。ルソーよりデイドロ。ところが私のことばは、どちらかといえばルソーのほうにちかひの。その自覚があったので、『思想』十月号の座談会におけるジャック・ブルーストというデイドロ学者の発言にこころひかれた。デイドロの哲学論は体系的にはなく断片的にかかっている。それはなぜかというところ――

「かれにとつて真実はいつもよそにある。人間が把握しうるのは、真実にかんするいくつかの核のようなものでしかない。この真実のいくつかの核について吟味する。それらをはじけさせる。しかし、ひとつの真実の核からべつの実の核へと糸をつなぎ、脈絡をつけることはできない。そこは飛躍しなげればならないのだ」

むりして核と核とのあいだの空白を

があるようだ。そのことを反省するあまり飛躍や空白の味を強調しすぎ、できあがったものがしつこくなる。

水牛通信でも、かなりのかずの対談や座談会をやってきた。私が原稿におこしたのも、いくつかある。どれも効果をねらいすぎていて臭い。そう自分では感じていた。それでもやめようとしなかったから、私は、話されたことばをもとに文字原稿をつくるのが相当にすぎなのだろう。

八月のなかば、高橋悠治・八巻美恵のふたりと平野甲賀家でおちあい、暑気ばらいの呑み会をやった。暑くて日記を書く気がしない。そこで酒を呑みながらの座談会でごまかしてしまおうというもくろみもあったのだが、酔いのまわりが早すぎてかんたんに挫折した。席上、酔いつぶれる寸前に高橋悠治のいったことばが記憶にのこっている。

埋めてしまうと、うそをついた気分になる。あえて空白や切断をごまかさないうちが不足感のことは、どうやらちかづけるか。さつき私が記憶によつて引用した高橋悠治のことばが参考になる。要するにテープ・レコーダーをつかわなければいいのだ。

話されたことばを文字におきかえる過程を加速するかわりに、それをおくらせる。私がいいたかれのことばのうちで、私に必要な部分が記憶から消えてゆく。のこった部分も、もとの私たちとはいくらがちがったものになっている。それらの断片を文字にするすし、もとはといえ私ではなくかれの発言なのだから、それらの断片と断片とのあいだの空白を埋めることは私にはできない。そこで私は、はじめにこうことわる。

「かくのごとく私はきいた……」

でも、かれが正確にこのように語つ

「対談にでるのはいやだが、いっしょに話すだけならいい。話したことを相手がおぼえていて、それを書くというのがいい」

たしか、そんな話じゃなかったけ。こちらら酔っぱらっていたから、ぼんやりとしかおぼえていない。「如是我聞じやん。オシヤカさんだね」とかいったような気がする。あとはおぼろ――気がつくと平野家にちかひ成城学園の飲み屋で、二十年ぶりに偶然でつかわした知人と大声を発しながら握手をかわしていた。

充足感より不足感がいい。しかるに私には充足感のことばしかもちあわせがない。当然のなりゆきとして、しばしば（いまもそうなのだが）充足感のことばによつて不足感を語るというバカバカしい羽目におちいる。私は自分の好みに反して生きている。

たという保証はどこにもありません。この断片とあの断片をつなぐ脈絡も欠けたままにしておきます。ご了承ください。――ほら、やっぱりお経だ。テープ・レコーダーを廃する。そうすれば十一歳の料理少年語録からでも、お経をつくることができる。

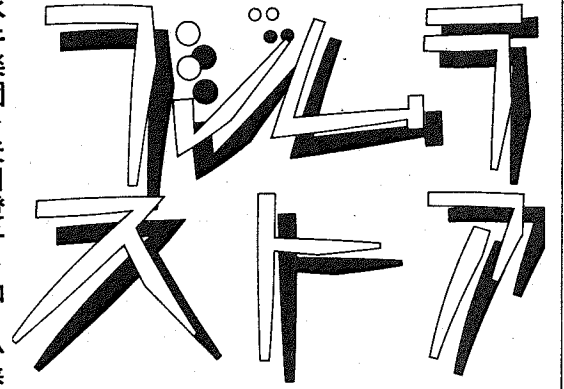
津野海太郎

編集後記

「たのしみがない」といつてられなくなつたのが悠治さん。「このごろはジャズの仕事しか来なくなつた」といいながらも、多忙なスケジュール。ハーモニカの崎元譲、東京混声合唱団、ドラムスの豊住芳三郎、クラリネットの坂田明、箏の沢井一恵、ピアノの三宅榛名、同じく坂本龍一、役者で歌うたいの齋藤晴彦、そして水牛楽団として詩人・作家の矢川澄子、らと共演。

本誌のイラスト(?)でおなじみの弦ちゃんこと柳生弦一郎さんも大活躍。特に「思想の科学」にエッセイを連載中の高橋幸子さんの単行本「みみずの学校」の表紙は、その学校でのびのびやつてるワンパク坊主と嬢主(?)らしき子どもたちが生き生きしていて秀逸。ブック・デザインは平野甲賀さん。

カラワン歓迎コンサートで、観客の爆笑を誘った齋藤晴彦さんは、とうとう住みなれた新宿を離れ吉祥寺に引越した。ゴールデン街や三丁目の飲み屋との「癒着」を切り離すためだ、というのが本人の引越の弁。もともと新居をきめに行った夜、吉祥寺中を痛飲して早くも新しい癒着との声もある。(田)



水牛楽団+矢川澄子+如月小春
定価二三〇〇円(送料サービス)
夜遣いの曲 しずくの曲 祖母
のうた 最後のノート だるま
さん千字文 ワルシヤワ労働歌
花巻農学校精神歌 ポクハソ
ンケイスル 都市 ★編集部あ
て郵便振替で申し込んで下さい

*予約購読の申し込みと送金は郵便振替を利用してください。

口座名 水牛編集委員会
口座番号 東京四一九一七九二
購読料 一年分三〇〇〇円(送料共)
住所、氏名、電話番号、何号からと明記。
*本誌は次の書店にあります。

模楽舎(新宿) ☎三五二一三五五七
ブックイン(阿佐谷) ☎三三〇一七八九七
信愛書店(西荻窪) ☎三三三二四九六一
ワンラブブックス(下北沢) ☎四一一八三〇二
アール・ヴィヴァン(西武池袋店12F)
カンカンボア(西武渋谷店B館B1)
ストアデイズ(六本木ウエイブ4F)
名古屋ウニタ書店 ☎七三二二二三八〇

水牛通信 第六巻第十一号

一九八四年十一月十日

定価 二〇〇円

発行人 堀田正彦

発行所 水牛編集委員会

〒154東京都世田谷区新町2-15-3

八巻方

電話〇三(四二五)九六五八

振替口座東京四一九一七九二

印刷所 (株)トライプリントショップ